

Nihonbashi Opera Tokyo 2021

日本橋オペラ 2021

# Madame Chrysanthème

by Pierre Loti music by André Messager

# 歌劇 お菊さん



Japan premiere

May 29 / 30 2021 Nihonbashi Theater Tokyo



ピエール・ロティ原作  
アンドレ・メサジェ作曲

日本初演

2021年5月29日(土) / 5月30日(日) 日本橋劇場



福田祥子

日本橋オペラ研究会会長

ご挨拶

日本橋オペラ 2021 歌劇「お菊さん」にお越しいただきありがとうございます。本公演は新型コロナウイルスの影響で一年延期となりましたが、ここに記念すべき日本初演ができることを皆様と喜びたいと思います。

このオペラは史実に基づいています。原作者のピエール・ロティは 1885 年（明治 18 年）にフランス海軍士官として長崎を訪れ、当地で日本人女性のおカネさんと過ごした短い結婚生活から、小説「お菊さん」を書き、欧米で大ヒットします。この小説を基にアンドレ・メサジェが歌劇「お菊さん」を作曲、1893 年にパリで初演されました。おカネさん、ピエール、イヴの三人で撮影した写真をプログラム表紙に掲載していますが、この写真は長崎の上野彦馬撮影所で撮影されました。ロティは世界的作家として歴史に名を刻み、長崎には今なおロティの足跡が残っていますが、おカネさんのその後の生活は、提灯屋と再婚したということ以外、これまでほとんど知られていません。今回私たちの研究で、おカネさんの生い立ちとその後の生活、あるいはメサジェとプッチーニの関係などが明らかになりました。それらは大きな驚きと同時に、このオペラの奥深さを感じました。今日の上演をきっかけにさらに研究が進み、音楽史や世界史が書き換えられるかもしれません。一言でいうと歌劇「お菊さん」は、私たち一人一人に繋がる宝の山です！

私たちが歌劇「お菊さん」に出会ったのは 3 年以上前になります。マスカーニの「イリス」の公演を控えプログラムを作成していた時、歌劇「マダム・クリザンテーム（お菊さん）」の存在を知り、インターネットの無料楽譜をダウンロードして、早速歌ってみました。楽譜は 130 年前のもので、所々かすれていましたが、19 世紀末の華やかなフランス音楽に加えて、南無阿弥陀仏を唱える合唱には、本当に度肝を抜かれました。その音楽は当時のオペレッタの範疇を超え、演奏には高度な多様性が求められます。そして、日本が舞台の忘れ去られたオペラを上演する歴史的使命を感じました。それから 1 年をかけて日本語に翻訳し、多数の音の間違いを直して、ようやく今日の楽譜ができました。この作品の最大の魅力は、ここに登場する日本人の生き生きとした姿です。それはロティが見下したはずの明治の日本人が、実に人生を楽しみ、賢くしなやかに描かれています。さらに今回は、金春流能楽師の山井綱雄さんにオペラの中で能を舞って頂きます。東西の伝統的な舞台芸術がコラボして、何かが生まれることを期待します。

お楽しみいただけましたら幸いです。

## 佐々木 修 (Osamu Sasaki) / 指揮



青森県弘前市出身。武蔵野音楽大学卒業。オーストリア政府奨学生。モーツァルト音楽大学指揮科最優秀卒業。カラヤン、チェリビダッケなどの巨匠に師事。モーツァルト音楽大学オーケストラ常任指揮者をつとめる。1979 年カラヤン国際指揮者コンクール入賞。1982 年東洋人として初めて、ザルツブルク国際モーツァルト週間で指揮「心から自然でしなやか、新鮮なモーツァルト指揮者」（オペラ・コンツェルト誌）と評を受け、国際モーツァルト財団よりパウムガルトナーメダルを授与される。1984 年ベルリン・ドイツ響を指揮してリアス放送新人演奏会に出演。帰国後、日本各地のオーケストラ、合唱を指揮。また NHK-FM のパーソナリティー、民放の音楽番組制作、映像・CD 制作、モバイルコンテンツ「ルナルナ」の創設など、マルチなタレントで活躍。近年はワーグナー指揮者として「ニーベルングの指環」全曲、「トリスタンとイゾルデ」と連続して指揮をして注目されている。日本橋オペラ常任指揮者。

## 居福健太郎 (Kentaro Ifuku) / ピアノ



東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、東京藝術大学を経て同大学院修士課程修了。これまでにソリストとして東京交響楽団、日本フィル、オーケストラ・アンサンブル金沢、仙台フィル、セントラル愛知交響楽団と共演。「題名のない音楽会」等のメディア出演、都民芸術フェスティバルオーケストラシリーズのソリスト出演、東京・春・音楽祭アフィニス夏の音楽祭等の音楽祭に参加し、国内外で充実した演奏活動を展開している。室内楽奏者として五嶋龍、戸田弥生、山崎伸子、ヘンリック・ヴィーゼ（バイエルン放送交響楽団首席奏者）との共演や、小菅優とのピアノデュオをはじめ多くの奏者から強い信頼を得ている。現在、東京藝術大学ピアノ科非常勤講師及び同大学声楽科演奏研究員。

## 山井 綱雄 (Tsunao Yamai) / 金春流能楽師



シテ方金春（こんばる）流能楽師。重要無形文化財（総合指定）保持者。公益社団法人「能楽協会」理事。公益社団法人「金春円満井会」常務理事。山井綱雄 能の会「山井綱雄之會」主宰。能アマチュア愛好家の会「春綱会」主宰。平成 26 年度文化庁文化交流使（長期派遣型）。東日本大震災復興支援能楽の会「息吹の会」同人。NHK 文化センター青山本校講師 / JR 東日本「大人の休日倶楽部」講師。藤嶺学園藤沢中学校非常勤講師。能楽は世界最高の芸術である」との信念の下、能楽普及と「日本の心」の啓蒙に奔走している。初心者への能ワークショップ、学校公演など多数開催。海外公演や他ジャンル芸術家との共演。創作作品多数、能楽の新たな可能性にも挑む。

【公式ホームページ】<https://www.tsunao.net/>

### 福田祥子 (Shoko Fukuda) ソプラノ／お菊さん役



大阪音楽大学ピアノ科卒業。大阪芸術大学大学院声楽専攻修了。第6回大阪国際音楽コンクール第2位。東京二期会オペラ研修所本科首席修了、優秀賞受賞。これまで、ワルキューレ、ジークフリート、神々の黄昏、トリスタンとイゾルデ、さまよえるオランダ人、タンホイザー、蝶々夫人、椿姫、ドン・カルロ、トゥーランドット、トスカ、イリス、オネーギン、パリアッチ等に主役級の配役で出演。『圧倒的にして鮮烈な歌声と存在感。生まれながらのブリュンヒルデ』『日本にも真に世界にも通用する本格的なオペラ歌手誕生か』(音楽現代他)と批評を受けている。ウィーン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場で研修を受け、近年はスタラ・ザゴラ国立歌劇場(ブルガリア)、コシチュ国立歌劇場(スロバキア)などで、蝶々夫人、トスカの主役として度々出演、絶賛されている。また日本各地をはじめ、オーストリア、ドイツ、チェコ、トルコ、イスラエル、フィリピンなどで、リサイタルやオーケストラとの共演を行なっている。東京二期会、関西二期会各会員。

### 池本和憲 (Kazunori Ikemoto) テノール／ピエール役



武蔵野音楽大学卒業、同大学院修了。日伊声楽コンクール入選、イタリアにて修学後、「蝶々夫人」ピンカートン役で新国立劇場にデビュー。同劇場にて世界的歌手と共演。宮本亜門演出「キャンディード」総督役で出演する等、オペレッタ、ミュージカルに至るまで、幅広いレパートリーで活動を展開。ワーグナー「神々の黄昏」ジークフリート役、「トリスタンとイゾルデ」トリスタン役を3つのプロダクションで出演、ヘルデンテノールとしても活躍。TV出演、文化庁主催学校公演、またアマチュア合唱団の指導者としても多くの合唱祭、定期演奏会を企画、指揮している。CD「マザーテレサの祈り」リリース。藤原歌劇団団員、埼玉オペラ協会会員。

### 上田誠司 (Seiji Ueda) バリトン／イヴ役



青森県出身。武蔵野音楽大学卒業、及び同大学院修了。第43回イタリア声楽コンクール入選。2011年藤原歌劇団本公演「フィガロの結婚」タイトルロールでデビューし、好評を得た。2013年からイタリアのミラノに留学。その年の夏ペーザロにてアカデミアロッシニアーナに参加し、「ランスの旅」でドン・アルヴァーロを演じ、好評を得る。その他「コジ・ファン・トゥッテ」「ドン・ジョヴァンニ」「結婚手形」「絹のはしご」「チェネレントラ」「愛の妙薬」「道化師」「こうもり」「カルメン」「ティレジアスの乳房」「アマールと夜の訪問者」等、演じる。また「第九」「カルミナ・ブラーナ」等のソリストを務める。藤原歌劇団団員。

### 飯沼友規 (Tomoki Inuma) テノール／勘五郎役(結婚仲介人)



千葉市出身。日本大学芸術学部音楽学科声楽専攻を首席で卒業。同大学院芸術学研究科音楽芸術専攻博士前期課程を修了。学部卒業時に芸術学部長賞を受賞。読売新人演奏会に出演。これまでに「椿姫」(アルフレード)、「外套」(ルイーゼ)、ナブッコ(イズマエーレ)、「愛の妙薬」(ネモリーノ)、「こうもり」(アイゼンシュタイン)など主要キャストとして多数出演。大学卒業後、イタリア留学で研鑽を積み、近年では自身が演奏活動をする傍ら、様々な形の演奏会の企画、構成、演出も行っている。また、イタリアで得た技術をもとに合唱団や個人の指導にも精力的に取り組んでいる。声楽を Lina Vasta、中島基晴、丹羽勝海の諸氏に師事。

### 大倉修平 (Shuhei Ookura) バリトン／サトウ役(お菊さんの義父)



(言語ではMonsieur Sucre=砂糖氏)

国立音楽大学声楽科卒業。これまでに『カヴァレリア・ルスティカーナ』アルフィオ、『ラ・ボエーム』ショナール、『仮面舞踏会』サミュエル、『椿姫』医師グランヴィル、『トゥーランドット』ピン、『アドリアーナ・ルクヴルール』キノー、『蝶々夫人』ヤクシデ役等でオペラ公演に出演。

### 田辺いづみ (Izumi Tanabe) メゾソプラノ／お梅役(お菊さんの義母)



国際基督教大学人文科学科及び国立音楽大学声楽学科卒業。国立音大大学院オペラコース修了。「カルメン」「フィガロの結婚」「魔笛」「ワルキューレ」「神々の黄昏」「ドン・カルロ」「アドリアーナ・ルクヴルール」「アンドレア・シェニエ」「泥棒とオールドミス」等のオペラの他、リゲティ「ル・グラン・マカーブル」、プロコフィエフ「修道院での結婚」等の日本初演に主要キャストとして出演した。宗教曲ではバッハ「マタイ受難曲」ヘンデル「メサイア」デュリュフレ「レクイエム」等のアルトソロを務める。二期会、東京室内歌劇場会員。

### 根岸一郎 (Ichiro Negishi) テノール／甲板員・シャルル役(水兵)



武蔵野音楽大学声楽科、早稲田大学文学部仏文専修卒業。パリ第IV大学修士。日仏声楽コンクール、フランス音楽コンクール、アンリ・ソーゲ国際コンクール(仏・マルティグ市)に入賞。中世・ルネサンスから現代作品まで幅広く活動し、フランス近代歌曲での評価は特に高く日仏声楽声楽コンクール審査員を務める。ヴォーカル・アンサンブルカペラなど古楽グループでの演奏、録音にも多数参加。日本フォーレ協会、コンセル・C、東京室内歌劇場会員。

### 高橋千夏 (Chinatsu Takahashi) ソプラノ／お雪役(お菊さんの義娘)



昭和音楽大学卒業。故・五十嵐郁子、照屋江美子の各氏に師事。第1回日本歌曲コンクール奨励賞受賞。W. マッテウツィ、M. デヴィーア、D. マツォーラ各氏によるマスタークラス受講。第82回読売新人演奏会に出演。Teatro Progetto Nuovi 公演「修道女アンジェリカ」タイトルロールで出演。スガナミ音楽教室声楽講師。

### 菊池未来 (Miku Kikuchi) <sup>いちご</sup>メゾソプラノ／<sup>いちご</sup>莓役(芸者見習)



岩手県出身。昭和音楽大学卒業。公益財団法人日本オペラ振興会オペラ歌手育成部第37期修了。「秘密の結婚」フィダルマ、「カルメン」メルセデス、「ラ・チェネレントラ」ティーズベを演じる。これまでに村松玲子、故細川久美子、鈴木とも恵、八尋久仁代各氏に師事。藤原歌劇団準団員、日本オペラ協会準会員。



加護友也 (Yuya Kago) テノール／ラウル役(水兵)

昭和音楽大学声楽学科、同大学院修士課程音楽芸術表現専攻オペラ卒業。声楽を森岡憲昭、井ノ上吏各氏に師事。これまで複数のオペラに合唱として参加する他、演劇やイマーシブシアターにも役者として参加。日本橋オペラには2019年の《蝶々夫人》に合唱で出演。



吉永研二 (Kenji Yoshinaga) バリトン／ルネ役(水兵)

熊本県出身。大分県立芸術文化短期大学、同大学専攻科を首席で修了。東京藝術大学声楽科バス専攻を卒業、武蔵野音楽大学大学院音楽研究科博士前期課程修了。第80回読売新人演奏会出演。大学院時代は冬の旅を研究し、古典ドイツリートのリパートリーを多く持つ。カルチャーセンター新所沢店講師。



小川陽久 (Haruhisa Ogawa) バリトン／ジャック役(水兵)

香川県立坂出高等学校を経て、愛知県立芸術大学卒業。同大学院修了。在学中に学内選抜による卒業演奏会に出演。同大学オペラモーツァルト作曲《皇帝ティートの慈悲》プブリオ役、フンパーディング作曲《ヘンゼルとグレーテル》ペーター役で出演。二期会オペラ研修所マスタークラス修了予定。これまでに声楽を七條功、前田朋紀、末吉利行、服部容子の各氏に師事。



町村 彰 (Akira Machimura) テノール／丹波役(民衆)

東京大学大学院、修士課程修了。永井宏氏に指揮法を、青木洋也、大山大輔、T. プファイファーの各氏に声楽を学ぶ。第28回日本ドイツ歌曲コンクール入選。過去にJ.S. バッハ『マタイ受難曲』福音史家、『ロ短調ミサ』テノール/バスソリスト、W.A. モーツァルト『コジ・ファン・トゥッテ』ドン・アルフォンソなど。



吉田 覚 (Satoru Yoshida) テノール／京都役(民衆)

洗足学園音楽大学ファゴット専攻卒業。その後声楽に転向。洗足学園音楽大学大学院声楽専攻修了。オペラでは「こうもり」アルフレード役、「トゥーランドット」ポン役などで出演。英国STAT公認 アレクサンダー・テクニーク教師。アンドーヴァー・エデュケーターズ® 日本 公認指導者



櫻井 航 (Wataru Sakurai) バリトン／一作役(民衆)

自由学園高等科卒業。東京音楽大学声楽科、同大学院オペラ研究領域修了。主な出演に『フィガロの結婚』アルマヴィーヴァ伯爵、『ラ・ボエーム』マルチェッロ、『トゥーランドット』ピン、等。二期会合唱団として、近年は『トゥーランドット』『タンホイザー』等出演。他にもオペレッタの台詞役、コンサートMC、YouTubeチャンネル『オペラマガジン♪』など、幅広く活躍をしている。二期会準会員。



小川嘉世 (Kayo Ogawa) ソプラノ／水仙役(民衆)

国立音楽大学声楽科卒業。尚美ミュージックカレッジ ディプロマ科修了、東京二期会研修所第57期マスタークラス修了。様々なオペラに出演し、ベートーヴェン「第九」や宗教曲のソロなども務める。宮永康生、吉澤祐江、飯山恵巳子の各氏に師事。東京室内歌劇場、東京二期会会員。



高橋みのり (Minori Takahashi) ソプラノ／茉莉花役(民衆)

中央大学経済学部卒業。社会人を経て東邦音楽大学大学院、同大学ウィーンアカデミー修了。東京国際芸術協会および国際芸術連盟新人オーディション合格。第4回東京国際声楽コンクール愛好家部門第2位(1位なし)。ハイドン「天地創造」のソリストをつとめる。声楽を故白石敬子、武藤直美、片岡啓子、望月哲也各氏に師事。



小宅慶子 (Keiko Oyake) ソプラノ／桔梗役(民衆)

東京音楽大学声楽専攻声楽演奏家コースを卒業。在学中、学内のオーディションに合格し、演奏会に多数出演。また共済病院でのロビーコンサートに出演し好評を得た。2019年、新宿区民オペラ『トゥーランドット』で侍女役に出演。北区文化振興財団アーティストバンクに登録。水野貴子、武田正雄の各氏に師事。



渡谷真衣 (Mai Watariya) メゾソプラノ／椿役(民衆)

国立音楽大学声楽専修卒業。これまでに「フィガロの結婚」ケルビーノ役、「サンドリヨン(日本語公演)」精霊役、「白鷺幻想」雪の精役、「白雪姫」ゴンゾ役にそれぞれ出演。前年12月には地元である栃木県の記念オペラ「小山物語」で八島役を演じる等、幅広い作品に出演している。声楽を井坂恵氏に師事。二期会準会員。東京室内歌劇場会員。



宇津木明香音 (Akane Utsuki) メゾソプラノ／撫子役(民衆)

昭和音楽大学大学院卒業。大森智子に師事。在学中にダンテ・マッツォーラ、マリエッラ・デヴィーアの各氏のマスタークラスを受講。2016年昭和音楽大学オペラ《コジ・ファン・トゥッテ》ドラベッラ役でオペラデビュー。2017年小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト《カルメン》合唱アルト。2018年昭和音楽大学オペラ《ファルスタッフ》クイックリー役で出演。藤原歌劇団 準団員



清水由紀 (Yuki Shimizu) 打楽器

東京音楽大学付属高等学校を経て、同大学を卒業。野口力、菅原淳、藤本隆文、岡田真理子、藤本佳子の各氏に師事。2005年横浜オペラ未来プロジェクト(オーケストラ部門)合格、2017年ジャパン・フェスティバル・オーケストラサウジアラビア公演に参加。オーケストラ Afia メンバー。

## 歌劇「お菊さん」あらすじ

時：1885年夏 場所：東シナ海と長崎

## 《プロローグ》

海上、満天の星が降り注ぐ穏やかな夜。夜中の2時。フランスの戦艦上、見張り水夫のブルターニュの歌が聞こえる。いよいよ日本が近づいて来た。海軍中尉のピエールとその弟分の水夫イヴは、日本への憧れと恋愛を夢見る。ピエールは到着したらすぐに、小柄で黒髪の子供の娘と結婚して、竹と紙でできた小さな家に暮らす計画だ。イヴは、世界中の女が我らを待っていると豪語する。海軍のファンファーレが港への到着を告げ、場面が変わる。

## 《第1幕》

長崎に到着すると、船にはたくさんの日本人の商人がやってきて、陶器やハツカネズミ、春画などを売りつける。つづいて芸者が登場する。一人の芸者が「ハスの花の上に羽を休める黄金の蝶」と歌う。その芸者こそお菊さんであった。彼女は江戸生まれで、家が没落して長崎に売られて来た。彼女は自らの生い立ちを語り、ピエールは彼女に強く惹かれる。ピエールが彼女の名前を聞き、彼女が答えようとする寸前、イヴは結婚仲介人の勘五郎の到着を告げる。機転が利き商才に長ける勘五郎は、自らを洗濯屋、



通訳、詩人で、秘密厳守、ミカドの認定請負人と早口でPRする。勘五郎は何人かの娘を紹介するが、ピエールは気乗りしない。彼は先の芸者のことを問うが、勘五郎は、その娘は親もなく素性も知れぬ、江戸芸者学校の出だとお勧めしない口ぶり。勘五郎はさらに他の娘を紹介するがピエールは断る。勘五郎はピエールの心を見抜き、一旦退場して、その芸者の義理の両親であるサトウとお梅を連れて再登場する。証人と家族を紹介して、ついで花嫁がヴェールを外すと、花嫁はその芸者だった。大喜びするピエール。最後に勘五郎は「お菊さん」の名前を発表する。

## 《第2幕》

結婚初夜の翌朝、お菊さんの家。メランコリックな前奏曲。義母のお梅は天照大神に、全ての人のけがれを祓い、健康を守ってくれと祈る。彼女はお菊さんとピエールがまだ寝ている寝室の襖を開け、すぐに閉める。お梅は白人の男は魅力的だと思わずつぶやき、特に背の高いイヴがお気に入りの様子で、必死に自分の貞操感を抑える。イヴ、勘五郎、義父のサトウがやってくる。サトウは画家で、勘五郎はピエールからお菊さんの両親への謝礼として、サトウにコウノトリの絵を描かせる。ピエールはブルターニュで見た夢の国「日本」を思い出し、お菊さんへの愛を歌う。お菊さんは花瓶に花を飾りながら、花と蝶の運命を語る。ピエールはお菊さんに益々惹かれ、彼女への愛を誓う。お菊さんは「言葉は裏切るので誓わないで」と答える。遠くからフランス民謡が聞こえてくる。ブルターニュの古い習慣に従い、水兵やお菊さんの友人の娘たちが、結婚翌朝に夫婦を祝福にきたのだ。お菊さんの義妹のお雪は、イヴから習ったブルターニュの祝いの歌を歌い、皆で祝宴に出発する。

## 《第3幕》

長崎諏訪神社の祭礼。南無阿弥陀仏を唱える僧侶や群衆の荘厳な合唱。つづいて長崎の夏祭り。人々は長崎くんちの歓声を上げ、勘五郎が見世物の呼び声を響かせる。ピエールはあまりの騒ぎに目を回す。気がつくと、イヴとお菊さんが取り残されていた。お菊さんはイヴに、自らの運命と歌への愛を語る。ピエールがお雪や友人たちと戻ってくる。ピエールは祭りで買った日本の経典を手に入れている。ピエールはイヴとお菊さんに嫉妬して、当て付けて、詩吟の真似をして大日如来の一節を読み、嫉妬の重罪を説く。お菊さんは扇子に書かれた句を読み、扇子が人々を和解に導くと、扇合せ(おうぎあわせ)のスタイルで返答する。ピエールはイヴとお菊さんとの深い関係を確認する。お雪は日本の娘を鳩に例えて、フランスの友人との永遠の愛を願って歌う。民衆が現れ、タバコこそ健康の源と、下駄でステップを踏みながら合唱する。フランスの水兵はそれを奇妙に眺めている。つづいてフランスオペラに欠かせないバレエの場面。ゆったりとした平安調の踊りに始まり、後半は、さくらさくらをアレンジした華やかなファランドールが舞われる。つづいて、このオペラで唯一100年間歌い継がれてきた、お菊さんのアリア「セミたちの歌」が歌われる。教会の鐘が鳴り響き、一同急ぎ退場する。そこにピエールが現れ、人前で歌ったお菊さんを怒り責める。お菊さんは、祭りの芸者の数が不足し出演したと謝り、イヴは許しを請い、二人の仲を疑っているピエールは逆上する劇的な三重唱。そこに勘五郎が登場、結婚相手は返品可能だとなだめるが、ピエールの怒りは収まらない。再び第3幕冒頭の南無阿弥陀仏を唱える合唱が響き渡る。

## 《第4幕》

お菊さんの家の庭、星の輝く夜、遠くに不知火が浮かぶ。お菊さんとお雪は、黄金の竖琴の調べに乗せて、甘美な二重唱を歌う。二人の姿を見たピエールは感動して、お菊さんとの愛の生活が、自分に新たな目覚めをもたらしたと、官能的なアリアを歌う。お菊さんは、もう捨てられるかとピエールに問うが、ピエールは再び熱烈にお菊さんに求愛する。情熱的な愛の二重唱が頂点に達したとき、船の大砲が鳴り響く。お菊さんはその大砲が意味することをわかっている。動揺するピエール。イヴがやってきて帰艦命令が出たことを伝える。イヴはフランスへ戻れる喜びと、故郷のブルターニュで待つ家族への愛を歌う。サトウとお梅、お雪が、別れの挨拶にやってくる。勘五郎は大げさに別れを嘆くが、しっかりと次の船への取り次ぎを頼み、洗濯物の勘定書として仲介料を請求する。高額で驚くイヴ。ピエールはこの夏の長崎の滞在とお菊さんへの想いを感傷的に歌い、お菊さんをしっかりと抱きしめる。ピエールが船に戻ると、イヴがお菊さんに別れを告げにやってくる。お菊さんはイヴに、船が沖に出たらピエールに手紙を渡してくれと託し、ピエールが彼女の話を見聞かず、信じず、笑いもしなかったことが悲しかったと言い残す。

## 《エピローグ》

冒頭と同じフランスの戦艦上、再び見張り水夫の歌が聞こえる。船は出航して、日本の最後の明かりが消えゆく。ピエールとイヴは日本での思い出を語る。お菊さんとイヴとの関係をまだ疑っているピエールに、イヴは強く否定して、お菊さんから託された手紙を渡す。ピエールは手紙を読む「あなたに知って欲しいの。あなたが遠く私から離れたとき、日本にも、あなたを愛し、そして泣いた女がいたことを！」美しくも哀愁を帯びた後奏で全曲の幕となる。

## 演出ノート

今回の公演は、新型コロナウイルスの感染予防の観点から、大きな制約の中での上演となります。まず感染のリスクを下げるため、合唱は関係機関のガイドラインに沿って、前方2mのソーシャルディスタンスを取り、一部マスクを着用して歌います。またソリスト同士も、できるだけ密な接触を避ける演出をします。さらに客席を利用した演出を断念します。

「お菊さん」はどうしてこれまで上演されなかったのですか？という質問をよく受けます。その一番の理由は、同じく長崎が舞台で、共に外国人船員と日本人女性が主役である、ブッチーニの名作「蝶々夫人」の陰に隠れたことでしょう。「蝶々夫人」は、今なお世界で最も上演される人気オペラの一つです。ただここで見逃してはならないのは、「蝶々夫人」の初演は大失敗であり、その後数回書き直され、ようやく人気オペラとして定着したということです。そういう意味では「お菊さん」が、ほぼフランス語圏でのみ上演され、書き直されることなく歴史に埋もれたことは、「お菊さん」には潜在価値があるかもしれないということです。

このオペラの大きな特徴は、小説「お菊さん」のストーリーに沿い、登場人物もほぼ実在したことです。主役のお菊さん、ピエール、イヴ以外にも、結婚斡旋人として勘五郎が登場しますが、当時外国船の船員は、この種の斡旋人をすべて勘五郎と呼んでいました。歌劇「蝶々夫人」のゴローもその短縮形です。一方オペラとしての体裁を整えるために、ロティの書いた小説とは違う部分もあります。それは、ピエールとお菊さんの恋愛に関わる部分です。作曲者のメサジェはパリ・オペラコミック座の指揮者で、多数のオペレッタを作曲しました。歌劇「お菊さん」も、歌以外にセリフや芝居が入り、もちろんそれらが全てフランス語でした。しかしその部分の記録がないことから、今日そのまま再現することはできません。私たちも、いつの日か言語で上演したいと思っていますが、少なくとも先人が歴史に残す価値はないと判断した作品を、今日皆様に「いいオペラだ、これからも上演してほしい！」と思って頂けるための工夫は必要だと考えました。日本語による上演も、その大きな決断です。また、お祭りの場面は、史実では長崎八坂神社の夏祭りですが、有名な諏訪神社の長崎くんちに置き換えています。もっともロティは15年後の長崎滞在では長崎くんちを見ています。

昨年文化庁の助成を受けて、このオペラの舞台である長崎を訪問しましたが、驚いたことに、諏訪神社の境内に、ロティ、お菊さん、イヴの3人が訪れた月見茶屋が現存していました。そこで当時と同じばた餅を食べながら、ロティやお菊さんが、隣にいるような気持ちになりました。その時このオペラは、単に130年前のフランスオペラではなく、このオペラを通じて、現在に生きる私たちに、人間の普遍性を問うオペラだと気がつきました。今回は金春流能楽師の山井綱雄さんに、オペラの中で能を舞って頂きます。これは東西の人間の交流と、明治から現代に至る一世紀という時が、能楽により化学反応を起こして、普遍的な人間の心が表現できるのでは、との期待からです。

約一世紀ぶりに世界の舞台に戻ってきた歌劇「お菊さん」が、再び歴史に埋もれるか、あるいは今後、日本や世界で上演されるか、それを決めるのは、今日ここにいらっしゃる皆様です。

《ブルターニュを知ろう!》

歌劇「お菊さん」のもう一方の主人公であるピエールとイヴはフランスのブルターニュ地方出身です。オペラの中には、何度も故郷を想う場面が出て来ます。しかし、ブルターニュは私たちが普通に思う、パリや南仏に代表されるフランスのイメージとはかなり異なっています。

《ブルターニュの地理》

ブルターニュはフランスの北西に位置するフランス最大の半島で、大西洋とイギリス海峡に向かって突き出しています。ブルターニュ半島西端に位置

する港湾都市ブレストは、古くからフランス海軍の重要な基地があり、ロティやイヴの軍艦トリオンファント号の母港でもあります。ブルターニュとパリとの距離は330kmなのに対し、対岸のブリテン島の南西の端、コーンウォールとは170kmしか離れていません。この地理的条件からブルターニュは、スコットランド、アイルランド、マン島、ウェールズ、コーンウォールと共にケルト諸語圏に入り、独自の文化を熟成させて来ました。ちなみにフランスではイギリスのことをグラン・ブルターニュ(大きなブルターニュ)と呼びます。5世紀ごろ、ブリテン島(イギリス)からブリトン人がブルターニュに移住したと言われます。

《パンもワインもないフランス!》

ブルターニュはフランスの中の異国と言われます。それを最も端的に表している表現は、「パンもワインもないフランス!」という、私たちにはにわかには信じられないキャッチフレーズです。ブルターニュは寒冷で小麦は育たず、主な穀類はソバです。そば粉で作るクレープのガレットは日本でも見かけますが、ブルターニュが発祥です。同様にブルターニュではワインではなく、シードル(リンゴ酒)が飲まれます。また、前述のケルト語を独自に発展させたブルトン語も使用されてきました。もっともフランス憲法でフランス語を公用語と定義していますので、ここでも異端児扱いされる所以です。

《トリスタンとイゾルデ》

ワーグナーの楽劇「トリスタンとイゾルデ」の舞台は、第1幕「アイルランドからコーンウォールに渡るトリスタンの船の甲板」第2幕「コーンウォールにあるマルケ王の城中」第3幕「ブルターニュにあるトリスタンの本城」と、まさにこのケルト諸語圏の物語なのです。1880年ミュンヘンで友人で作曲家のシャブリエと「トリスタンとイゾルデ」を観て大感激したメサジェが、自身初の本格的オペラとして「お菊さん」を作曲する際に、強く意識したことは疑いありません。





《ピエール・ロティと長崎》

トリオンファント号

19世紀末の長崎

歌劇「お菊さん」の原作である、小説「お菊さん」(マダム・クリザンテーム)の著者ピエール・ロティ(Pierre Loti 本名:ルイ・マリー＝ジュリアン・ヴィオー1850-1923)は、ブルターニュの南180kmほどに位置するロシュフォール生まれ。17歳のときブルターニュのプレストの海軍学校に入学します。フランス海軍士官として、トルコ、タヒチ、インド、中国、セネガルなど世界各地を回り、訪れた土地を題材にした小説や紀行文、また、当地の女性との恋愛体験をもとにした小説を多数書きました。ロティは名誉あるアカデミー・フランセーズ会員で、1923年の死去にあたっては国葬になったように、フランスでは大変著名な作家でした。

小説「お菊さん」には、ロティが長崎到着後すぐに、人力車夫に案内されて料亭百花園へ行った、との記述があります。百花園は見つかりませんでした。花月<sup>②</sup>という史跡料亭が現在も営業していることがわかりました。それもロティの寓居<sup>①</sup>からほど近い場所でした。花月は以前は引田屋と言われ、よくいえば国際人の社交場、普通に言えば遊女屋でした。江戸時代長崎の丸山は、江戸の吉原、京都の島原とともに天下の三大遊郭とうたわれ栄えた場所で、丸山町には50軒を超える遊女屋がありました。引田屋はその中心で、創業寛永19年(1642年)と大変歴史のある店です。ここを利用した人には、坂本龍馬、勝海舟、高杉晋作、木戸孝允、岩崎弥太郎、頼山陽など錚々たる人物がいます。グラバー夫人となったツルさんも、小説「お菊さん」のモデルとなったおカネさんも、ここに出入りしていた芸者だったのです。現在の料亭花月では、長崎発祥の卓袱料理(しっぽくりょうり)が出されます。これは大皿に盛られたコース料理で、円卓を囲んで、和食、中華、洋食、中でも出島に商館を構えたオランダの要素が互いに交じり合っていることから、和華蘭料理(わからんりょうり)と言われます。ちなみになぜ小説で「百花園」となったかですが、ロティはフランス語で「Jardin-des-Fleurs」と書きました。直訳すると「花園」ですが、翻訳した野上豊一郎が百をつけて「百花園」としたものでした。たしかに「Hikitaya」と書いても、世界の人にはわかりませんし、かといって日本語で「花園」では、あまりお上品とは言えません。



史跡料亭花月

卓袱料理

丸山町の遊女(明治)



長崎市十人町の、ロティとおカネさんが暮らした住居跡。

長崎にはロティの足跡が刻まれています。おカネさんと暮らした十善寺(現在の長崎市十人町9-23)の寓居跡<sup>①</sup>には、記念碑が建っています。階段や石垣は当時のままですが、建物は現存しません。当時の住居を再現した画が掲示されています。長崎に行ってもわかりませんが、おカネさんが暮らしていた生活範囲は非常にコンパクトでした。住居である義父母の佐藤家と、職場の丸山町<sup>②</sup>や港とは200mほど、出島<sup>⑤</sup>や大浦天主堂<sup>③</sup>、グラバー宅<sup>④</sup>までも500mほどの距離です。ロティは勘五郎に女性の斡旋を依頼します。しかしロティは勘五郎の用意した女性は気に入らず、同伴で覗きに来ていたおカネさんを気に入るのです。ロティは「あの子はどうだ?」と聞きます。勘五郎は驚いて「あの子は芸者ですよ!無理!無理!」と一端は断ります。ここでわかることは、当時は芸者と遊女は厳密に分かれていたことです。結局その夜、勘五郎は義父母の佐藤とお梅を説得して、おカネさんを月20ピアストルで売り渡すことに同意したのでした。

長崎くんちの舞台として有名な諏訪神社<sup>⑥</sup>に隣接する長崎公園には、ロティの記念碑があります。レリーフはフランス政府から寄贈され、1950年(昭和25年)に建立されました。長崎公園の月見茶屋は、なんとロティが訪れた1885年(明治18年)の開業で、ロティは香港茶屋(どんこちゃや)と紹介しています。諏訪神社の階段を登り、拝殿までたどり着いたら、左側の公園に月見茶屋、その目の前にロティの記念碑があります。諏訪神社の前には、表紙の写真を撮影した上野彦馬撮影所<sup>⑦</sup>がありました。



ロティの記念碑

創業1885年の月見茶屋

ロティも食べた「ぼた餅」



『狂女オカネの生涯』 鳥嶽(からすだけ)稲荷 おカネさんが暮らした洞窟 竹田市の設置した看板

『狂女オカネの生涯』  
 私たちがおカネさんのことを調べているとき、一冊のマニアックな本に出会いました。それは大分県立竹田高校の教師であった、後藤是美氏が自費出版した『狂女オカネの生涯』(昭和55年)という小冊です。正直申して、この「狂女」という言葉を見たときに、見なかったことにしたいという気持ちになりました。なぜならそれが事実でも、「お菊さん」のイメージが壊れることを恐れたからです。しかしここで重要なのは、この小冊が、直接おカネさんを見たり、助けた人の証言が含まれていることです。竹田の人々はおカネさんのことを歴史的事実として捉えています。おカネさんが暮らしていた鳥嶽稲荷の洞窟には、竹田市の看板があります。《隠しクリシタンの町》

2020年9月、私たちは竹田市を訪れました。おカネさんの洞窟①は、地元の人にもめったに近寄らない、荒れ果てた場所でした。第一印象は、このような場所に人間は20年も生きられないということです。おカネさんは、何人かの手厚い庇護を受けていました。もう一つ驚いたのは、竹田は江戸時代を通して、藩ぐるみで基督教を「かくして！」いた事実です。「荒城の月」で有名な岡城の一番奥の清水谷の観音堂には、百キロを超える長崎サンチャゴ病院の鐘(1612年鑄造)が250年に渡って隠されていました。また竹田には、多くのクリシタン遺物(右上)が残されています。町中にある稲荷は、基督教の礼拝所の隠れ蓑でした。竹田の人々全員が、殿様から民衆まで、隠れクリシタンだったということです。



Google Map 航空写真



滝廉太郎(1879-1903)が12歳から14歳まで暮らした屋敷②は、現在滝廉太郎記念館となっています。屋敷の裏庭には、隠れクリシタンの集会所跡と思われる洞窟があります。「荒城の月」のイメージとなった岡城跡には、朝倉文夫作による廉太郎の銅像があります。朝倉文夫は滝廉太郎の幼馴染で、鳥嶽に暮らしていたおカネさんに実際に会っています。

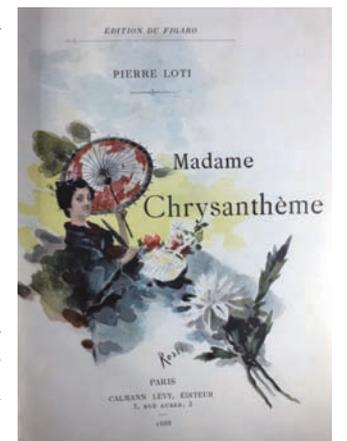


サンチャゴの鐘 竹田のクリシタン洞窟礼拝堂 INRI(ユダヤ人の王、ナザレのイエス)と刻まれた石碑 聖ヤコブの像

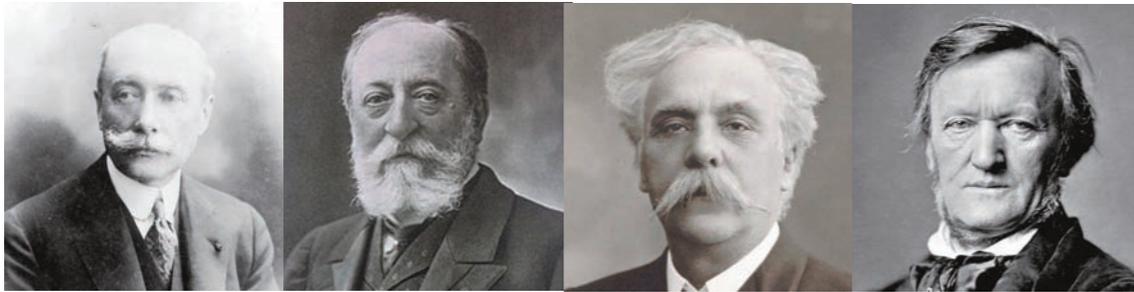
《おカネさんの生涯》

お菊さん、本名兼(カネ)は1869年(明治2年)大分県竹田の武士の家に生まれる。竹田は江戸時代を通して、藩ぐるみの「隠しクリシタン」の町であった。おカネさんは幼い頃から三味線などの芸事を嗜んだが、1877年(明治10年)の西南の役で家が焼き払われ、極貧の生活に入る。明治初期、竹田に縁のあるグラバー夫人つるさんの、長崎でのシンデレラストーリーは、竹田の全ての若い女の憧れであった。竹田には、つるさんと前夫との子供、おセンさんがいて、おカネさんの6歳年上のよき相談相手であった。おカネさんは12歳の頃、グラバー夫人を頼り、長崎で芸者になる。1885年(明治18年)おカネさん16歳の時ロティと結ばれる。おカネさんはロティを救世主イエスと重ねていたかもしれない。ロティとの結婚生活は1ヶ月で終わり、その数年後、おカネさんは本意ではなかったが、長崎郊外の川原の提灯屋(ムシュ・パンソン)と結婚する。1900年、(明治33年)15年ぶりにロティが長崎を再訪する。ロティはおカネさんの義母お梅とは頻りに会ったが、おカネさんには会おうとはしなかった。そのことはおカネさんにとって、人生で一番辛く悲しいことだったに違いない。おカネさんは家族を捨てて一人竹田に戻り、鳥嶽(からすだけ)稲荷の洞窟での信仰の生活に入った。竹田の人々は「狂人おカネ」と呼んでいたが、数人の信徒が親身になっておカネさんを助けていた。おカネさんはこの洞窟で20年間暮らし、1921年(大正10年)に死去する。享年52。長崎から息子が遺骨を取りに来たと伝えられているが、実子かどうかは定かではない。《滝廉太郎とおカネさんの歴史的面会》

「荒城の月」の作曲家として有名な滝廉太郎は、少年期を竹田で過ごしました。1901年にドイツに留学しますが、肺結核を患い翌年帰国、1903年に23歳で亡くなるまで、大分市に暮らします。大分に戻った廉太郎は体調を見計らって、第二の故郷である竹田を訪れました。大分市と竹田市は直線距離で40数キロです。竹田の廉太郎の暮らした屋敷②のすぐ裏、わずか100m足らずの洞窟①に、その時おカネさんが暮らしていたのです。廉太郎は1900年に基督教の洗礼を受けていますので、年齢はおカネさんが10歳年上ですが、クリスチャン同士です。廉太郎がドイツで購入した本を読んでいた時、おカネさんが通りかかりました。「あなた様はヨーロッパから帰国なさったそうですね。その本は?」「はい、フランスの有名な作家ピエール・ロティが長崎を訪問して書いた、小説《お菊夫人》です。」「ピエール・ロティ・・・ジュリアン・ヴィオさんね・・・お菊夫人?・・・それ私です・・・」マダム・クリザンテム(お菊さん)として、その名前を世界史に残したおカネさんと、日本のクラシック音楽黎明期の大作曲家滝廉太郎が、遭遇していた、かもしれません!



小説「お菊さん」の初版本



アンドレ・メサジェ  
(1853-1929)

カミーユ・サン＝サーンス  
(1835-1921)

ガブリエル・フォーレ  
(1845-1924)

リヒャルト・ワーグナー  
(1813-1883)

#### 《指揮者兼作曲家》

歌劇「お菊さん」の作曲家アンドレ・メサジェは、フランスのほぼ中央に位置するモンリュソン生まれ。パリのニーデルメイエ宗教音楽学校でサン＝サーンスなどに学びます。オペラ・コミック座、パリ・オペラ座、ロイヤルオペラハウス、コヴェント・ガーデンなどの指揮者や音楽監督を歴任しました。メサジェはドビュッシーの「ペレアスとメリザンド」の世界初演を指揮したように、当代一流の指揮者でした。メサジェはまた、20作品を超えるオペレッタを作曲しました。最もヒットした「ヴェロニク」はロンドンで500回近く上演されています。「お菊さん」は、当時オペラ・コミック座が火事で消失していたことから、1893年ルネサンス座で初演されました。

#### 《メサジェの作曲家の友人》

メサジェはガブリエル・フォーレと一時期同じアパートで暮らしました。またバイロイトと一緒に出かけ、ピアノ連弾曲「バイロイトの思い出」を共作しています。エマニュエル・シャブリエ(1841-1894)とは毎日会うほどの友人で、一緒にミュンヘンに「トリスタンとイゾルデ」を見に出かけました。シャブリエはこの興奮から、音楽の道に専念することを決意します。シャブリエとはピアノ連弾曲「ミュンヘンの思い出」を共作しています。セザール・フランク(1822-1890)とは毎週会いました。フランクのヴァイオリンソナタ「イ長調最終楽章」の有名なテーマの一部が、歌劇「お菊さん」の第4幕「愛の二重唱」で使われています。

#### 《指揮者メサジェが受けた影響》

当時の全ての音楽家にとって、ワーグナーの影響は絶大でした。「トリスタンとイゾルデ」(水夫の歌、モーロルトの歌、愛の二重唱)さらに「神々の黄昏」(2幕フィナーレ)、「タンホイザー」(夕星のアリア)は、歌劇「お菊さん」に直接的な影響を与えています。また1883年オペラ・コミック座で初演され、メサジェ自身が指揮したレオ・ドリーブの「ラクメ」(原作ピエール・ロティ)、あるいはビゼーの「カルメン」の影響も見逃せません。歌劇「お菊さん」の大きな特徴が、このように大作曲家の要素が散見されることであり、メサジェ自身の個性が乏しいという歴史的评价でもあります。メサジェは一流の音楽職人でした。



オペラ・コミック座



パリ・ルネサンス座



パリ・オペラ座



ロンドン・ロイヤルオペラ



アンリ・フェヴリエ  
(1875-1957)

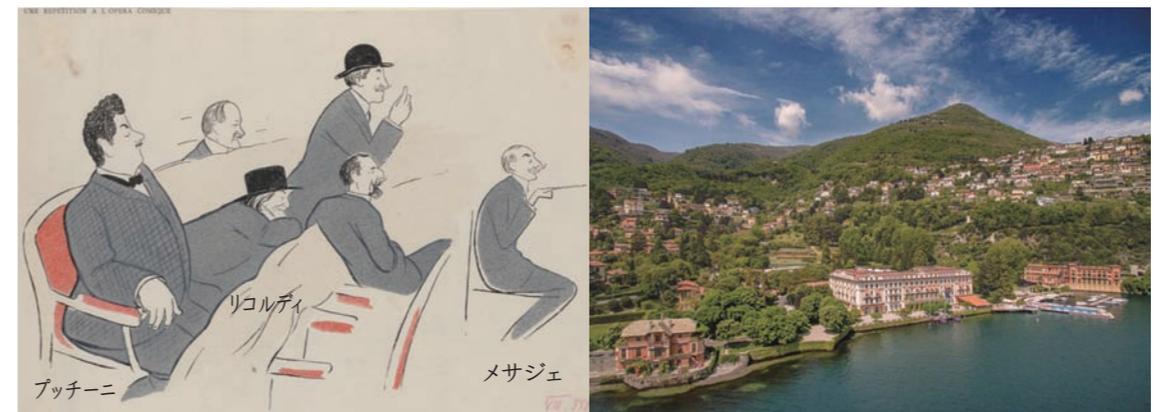
ジャコモ・プッチーニ  
(1858-1924)

ジュリオ・リコルディ  
(1840-1912)

ルッジェーロ・レオンカヴァッロ  
(1857-1919)

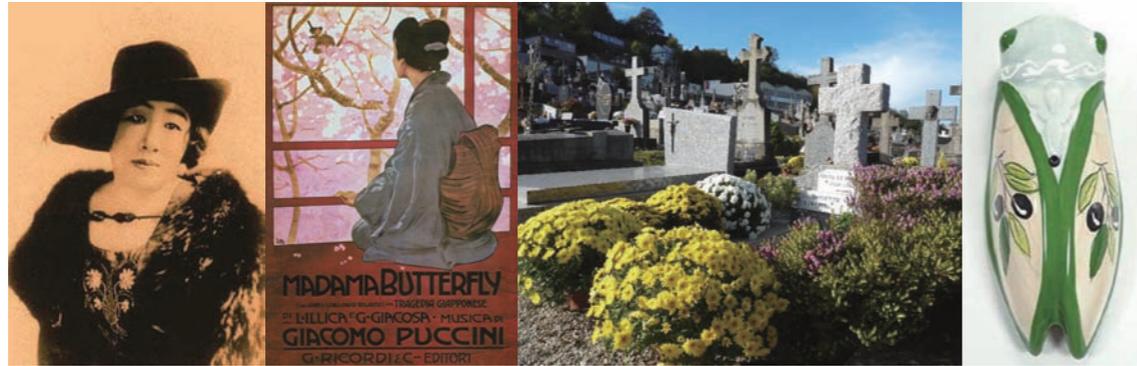
#### 《メサジェとプッチーニ》

メサジェの弟子の一人、作曲家のアンリ・フェヴリエは、1948年にメサジェの思い出を「私の師、私の友人」という文章に残しました。それによると、1892年夏メサジェとプッチーニは、ヨーロッパきっての避暑地として知られるイタリア・コモ湖畔のヴィラ・デステに滞在して、メサジェは「お菊さん」を、プッチーニは「マノン・レスコー」を作曲しました。これをアレンジしたのがミラノの有名な音楽出版社リコルディの社長、ジュリオ・リコルディでした。メサジェは当時既にパリ・オペラコミック座の首席指揮者で、フランス音楽界の実力者であった一方、プッチーニはマノン・レスコーが発表される前ですから、若い才能ある作曲家という立ち位置でした。ここで注目されるのは、この年の5月にミラノでレオンカヴァッロの「パリアッチ」(道化師)が初演され、大きな反響を呼んだことです。この作品はリコルディ社のライバルであるソソニーニ社から出版されたこともあり、ジュリオ・リコルディとしても社運をかけて、プッチーニの才能の開花とパリでの上演を目論み、両者をヴィラ・デステに招待したのでした。二人は当然のごとお互いの作曲中のスコアをピアノで弾き合いました。また、数ヶ月前に初演された「パリアッチ」のスコアも研究したことは想像に難くありません。結果として「お菊さん」や「マノン・レスコー」の中には、随所に「パリアッチ」の影響が見られます。また、後にプッチーニの作曲した「蝶々夫人」の「花の二重唱」は、お菊さんとお雪の二重唱の影響がはっきりと認められます。この夏の二人のヴィラ・デステでの滞在は、音楽史にとって重要な出来事です。ちなみに、1906年パリ・オペラコミック座のリハーサル風景のスケッチが残されています。これには指揮者のメサジェと共に、プッチーニ、ジュリオ・リコルディも描かれています。三者は正にビジネスパートナーでした。プッチーニはすでに大作曲家の仲間入りをしていました。



パリ・オペラコミック座「蝶々夫人」のリハーサル風景

ヴィラ・デステ



三浦環(1884-1946) 蝶々夫人初演時のポスター フランスのお墓 プロバンスの壁飾り

### 《歌劇「お菊さん」の上演記録》

歌劇「マダム・クリザンテム」(お菊さん)は、1893年1月21日パリのテアトル・リリック・ド・ラ・ルネッサンスでメサジェ自身の指揮により初演、その年に16回上演されました。その後、モンテカルロ(1901年12月～翌年1月)、ブリュッセル(1906年)、モントリオール(1912年)、ケベック(1929年)などのフランス語文化圏、また1920年1月17日シカゴオペラのニューヨーク公演(レキシントン・シアター)で、三浦環の主演で上演されました。コンサート形式では、1956年パリ、2016年マルセイユ、また同年フランスの高校で試演されましたが、いわゆる学芸会的な公演で、プロの歌手は出演していません。今回の日本橋オペラの公演は、全曲舞台上演としては92年ぶりの蘇演となります。特に、サトウのアリア、タバコの合唱、ダンスの場面(今回は能が舞います)、第四幕の半分ほどは、演奏会形式としても上演されていません。

### 《菊のイメージ》

日本で菊は、皇室の紋章として高貴な身分を象徴する花です。また浮世絵にも描かれ、19世紀末の欧米人にとって日本をイメージし易い花でした。しかしフランスでクリザンテム(菊)はお墓をイメージする花なのです。11月1日は諸聖人の日(トゥーサン)と呼ばれる祭日で、日本のお盆のようにお墓参りをして、菊の花を飾る習慣があります。フランス人が日本人女性の名前として「お菊さん」を目にすると、どこか悲しげなイメージが残ります。

### 《小説とオペラの「セミ」のイメージの違い》

ロティの小説「お菊さん」(野上豊一郎訳)では、セミの声が日本を象徴する「雑音」として何度も出てきます。『蝉の単調な鳴き声はオーケストラのクレッシェンドのように張り切って来た』『あの蝉の鳴き声～それは日本では生涯絶え間ない騒音の一つで、今に私たちも二、三日すると気にならなくなるだろう、それほど世間のあらゆる雑音の基礎になっている』『蝉の家族どもは昼も夜も私たちの古い響き易い屋根の上で鳴いている』『コオロギと蝉のオーケストラが、声をひそめてはいるが数限りなく鳴き立てて、そのトレモロで娘たちに伴奏する』一方、このオペラでお菊さんが歌う「セミたちの歌」のロマンティックなメロディーとロティの感じた蝉のイメージがかけ離れ、戸惑いがあります。しかし、フランスで蝉が生息するのは南仏のプロバンスだけで、フランス人にとって蝉は「幸せの象徴」であり「太陽の申し子」なのです。これならばアリアのイメージにぴったりですね。小説とオペラの違いも興味深いことです。ちなみに「セミたちの歌」は歌劇「お菊さん」の中で、唯一歌い続けられてきたアリアとして有名です。



フィンセント・ファン・ゴッホ ラ・ムスメ 小泉八雲 お雪と思われる女性と共に

### 《小説「お菊さん」を読んで人生が変わった有名人》

画家のゴッホ(1853-1890)は日本の浮世絵に大変惹かれ、多数の浮世絵を購入して研究しました。さらにロティの小説「お菊さん」を読み、日本に対する憧れは増します。ゴッホは日本を「限りなく明るい光がある国」と想像して、南仏の明るい太陽を求めアルルに移住します。またアルルの少女の肖像画に「ラ・ムスメ」と題しました。ちなみにロティは小説「お菊さん」の中で「ムスメ」という日本語が、一番響きがキレイで好きだと書いています。「耳なし芳一」「ろくろ首」「雪女」などの怪談の作者、小泉八雲(本名ラフカディオ・ハーン 1850-1904)は、ギリシャ生まれの英国人(父はアイルランド人)です。彼は小説「お菊さん」を読んで感激。1890年来日、小泉セツと結婚して日本に帰化しました。

### 《「お菊さん」の登場人物～その後》

ロティはお菊さんと過ごした翌年の1886年、ボルドーの資産家の娘と結婚します。1900年ロティは再び長崎を訪れ、今度は10ヶ月も滞在します。お菊さんは提灯屋のムシュ・パンソンに嫁いでおり、ロティはお菊さんに会いには行きませんでした。義父のサトウさんはすでに死亡して、お梅さんは未亡人でした。ロティは「お梅が3度目の春」という小説を書きます。またお雪がお梅の実子ではなく、サトウさんと不倫相手の子供だということも知りました。ロティは60歳までフランス海軍の船長を務めます。イヴの本名はピエール・ル・コル(1852-1927)ブルターニュ出身の海軍兵士でした。1877年同郷の少女と結婚しますが、同じ頃ロティと友人になり、ロスポルドンの家で3人で住みます。家の購入費用はロティが出しました。ピエール・ル・コルは1890年にロティとの関係を終わり、船を下りてブルターニュで教師をしました。ロティとイヴの関係は、表面的な上司と部下、もしくは小説のタイトルとなっている「私の友人イヴ」という以上の関係、つまり同性愛者でした。



ブルターニュ・ロスポルドンの家 「お梅が3度目の春」初版本 お梅の肖像画



川上貞奴

鹿鳴館(1883-1887)

トーマス・グラバー

## 《ロティの鹿鳴館訪問》

ロティは長崎を訪問した同年、1885年11月3日天長節(明治天皇の誕生日)の夜、鹿鳴館で開催された舞踏会に出席しました。詳細はロティ『秋の日本』(角川文庫)の『江戸の舞踏会』をご覧ください。ロティはダンスを踊る日本人を、「個性的な自発性がなく、ただ自動人形のように踊るだけ」と酷評しています。なお小説では、なぜか1886年とされています。芥川龍之介はこの小説に影響されて、短編小説「舞踏会」を、三島由紀夫は戯曲「舞踏会」を著しました。

## 《日本のリーダーを育てたグラバー》

鹿鳴館では、長崎のグラバー邸で有名なトーマス・グラバー(1838-1911)が名誉書記官として出迎えました。グラバーはスコットランド出身の武器商人で、長崎でグラバー商会を開業、幕末から明治初期にかけて日本の近代化に貢献しました。グラバーは、江戸末期外国留学が禁止されていた頃、長州や薩摩の若者に資金援助して、密かにヨーロッパ留学させました。その中の井上馨は、この時外務卿、伊藤博文は宮内卿(宮内庁長官)で、わずか1ヶ月後には、それぞれ初代外務大臣、初代内閣総理大臣になるタイミングでした。つまり昔世話した若者が、日本のリーダーになったので、今度はグラバーが仕事を頂いたという訳です。

## 《川上貞奴》

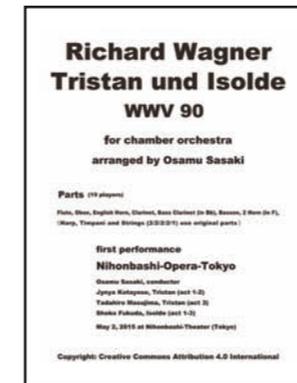
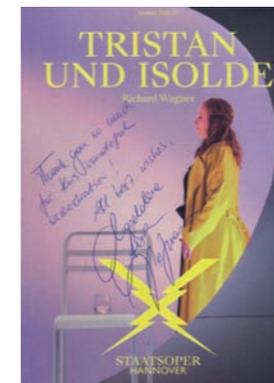
当日の舞踏会の接待役として、後に日本人初の女優となる、人形町の芸者貞奴(1871-1946)がいました。貞奴はこのとき若干14歳でしたが、すでに小奴として座敷に出ていました。伊藤博文に轟然とされ、ロティの目にも止まったはずです。ロティの小説「江戸の舞踏会」には「せいぜい15歳位の美人令嬢の奔放さに惹かれる」との記述があります。貞奴は15年後の1900年、パリ万博で演じ大反響を呼びます。ピカソやシャネルにも影響を与え、世界の女性開放運動に寄与した貞奴の人格形成が、鹿鳴館でのロティとの出会いにあったかもしれません。

## 《お菊さんは江戸生まれ》

ロティの鹿鳴館訪問は歌劇「お菊さん」に一つの変化を与えました。それはお菊さんが「江戸生まれ、江戸芸者学校の出」とされたことです。これは歌劇「蝶々夫人」で、蝶々さんが長崎の隣町、大村の出身ということと比べて明らかな違いです。歌劇「お菊さん」の中で、江戸芸者学校をパリのコンセルバトワールと比較する部分がありますが、おそらく今も昔も、パリでも東京でも、観客はニヤリとするはず。このように、時間と空間を超える、普遍的な価値、ジョーク、人間の喜び、愛、嫉妬、別れが、日本橋オペラ2021「お菊さん」の隠されたテーマです。



ドイツ・ハノーファー国立歌劇場



BEST OPERA HOUSE  
2020  
Hanover State Opera

日本橋オペラの第一回公演(2015)のために編曲・上演された、ワーグナー作曲「トリスタンとイゾルデ」縮小版の楽譜を使って、コロナ禍で大規模なオーケストラの上演ができないドイツ・ハノーファー歌劇場で、2020年秋4回の「トリスタンとイゾルデ」が上演され、高い評価を得ました。ハノーファー歌劇場は、全ヨーロッパで最も優れたオペラハウスとして、2020オペラアワードに選出されました。日本橋オペラの活動は、世界の音楽界に貢献しています。



ハノーファー国立歌劇場総監督  
ラウラ・バーマン / Laura Berman

*lieber Osamu Sasaki,  
wir wollten Ihnen ein kleines Geschenk aus  
Hannover schicken lassen als Dank für das  
großartige Arrangement. Es hat fantastische  
Eckungen + man ein großer Erfolg unter  
Austrenn trieb. ganz herzlichen Dank  
+ alles Gute,  
Laura Berman*

親愛なる佐々木様

私たちは、あなたの素晴らしい編曲に対して、心ばかりの贈り物をお届けします。公演はクリスティアン・トリンクス氏の指揮の元、ファンタスティックな響きで、大きな成果を上げました。心からの感謝とご多幸をお祈り申し上げます。

## 日本橋オペラの沿革

- 2013年 オペラ歌手福田祥子（日本橋在住）と指揮者の佐々木修が中心となり、日本橋オペラ研究会が中央区社会教育団体（会長福田祥子）として発足。
- 2013年 ワーグナーアカデミー「トリスタンとイゾルデ」（演奏会形式）（日暮里サニーホール）
- 2014年 ワーグナーアカデミー「ジークフリート、さまよえるオランダ人」（演奏会形式）（日暮里サニーホール）
- 2015年 日本橋オペラ第1回公演 ワーグナー「トリスタンとイゾルデ」（日本橋劇場）
- 2016年 日本橋オペラ第2回公演 プッチーニ「トスカ」（日本橋劇場）
- 2017年 日本橋オペラ特別公演～デュオリサイタル  
（ヒッレブランド、ヴァレントヴィッチ両氏招聘）（日本橋劇場）
- 2018年 日本橋オペラ第3回公演 マスカーニ「イリス」（日本橋劇場）中央区文化推進事業助成
- 2019年 日本橋オペラ第4回公演 プッチーニ「蝶々夫人」（日本橋劇場）内閣府「明治150年」
- 2020年 東京都 アートにエールを！（個人型）歌劇「お菊さん」百人一首編  
東京都 アートにエールを！（ステージ型）歌劇「お菊さん」南無阿弥陀仏編  
文化庁文化芸術活動の継続支援事業 歌劇「お菊さん」ゆかりの地～長崎・竹田～を訪れて  
上記の3つの動画を製作、いずれもYouTubeで発表。



2019年 プッチーニ「蝶々夫人」（日本橋劇場）

## 日本橋オペラ後援会

- ・日本橋オペラの事業目的に賛同していただける個人・法人。
- ・会費：年額 [個人] 1口2万円 [法人] 1口5万円、1口以上
- ・特典：日本橋オペラ公演のご招待券、プログラムの進呈（2名様）  
日本橋オペラ公演プログラムへのご芳名を顕彰させていただきます。

後援企業（2021年4月15日現在）



医療法人  
太田クリニック



## 日本橋オペラ2022予告

2022年5月22日(日)日本橋劇場 演目未定



## 日本橋オペラ2021

歌劇「お菊さん」全曲/Madame Chrysanthème

日本初演

作曲/アンドレ・メサジェ/André Messager

台本/ジョルジュ・アルトマン、アレクサンドル・アンドレ

原作/ピエール・ロティの小説「マダム・クリザンテーム(お菊さん)」

総合演出: 福田祥子/日本語上演/日本語・英語字幕付/ピアノ伴奏

日本語訳: 根岸一郎 日本語歌詞・楽譜編集: 佐々木 修

beyond2020プログラム(内閣府・文化庁)

～beyond2020プログラムは日本文化の魅力を発信するとともに、2020年以降を見据えたレガシー創出のための文化プログラムです～

2021年5月29日(土)/30日(日)各14:00開演 日本橋劇場(日本橋公会堂4F)

プロローグ・第1・2幕:50分 (休憩:20分) 第3・4幕・エピローグ:70分

指揮/佐々木 修 ピアノ/居福健太郎 金春流能楽師/山井綱雄

## 《配役》

お菊さん/福田祥子/ソプラノ	ピエール/池本和憲/テノール
イヴ/上田誠司/バリトン	勘五郎/飯沼友規/テノール
お梅/田辺いづみ/ソプラノ	サトウ/大倉修平/バリトン
お雪/高橋千夏/ソプラノ	苺/菊池未来/メゾソプラノ
甲板員&シャルル/根岸一郎/テノール	ラウル/加護友也/テノール
ルネ/吉永研二/バリトン	ジャック/小川陽久/バリトン
丹波/町村 彰/テノール	一作/櫻井 航/バリトン
京都/吉田 覚/テノール	水仙/小川嘉世/ソプラノ
茉莉花/高橋みのり/ソプラノ	桔梗/小宅慶子/ソプラノ
撫子/宇津木明香音/メゾソプラノ	椿/渡谷真衣/メゾソプラノ

打楽器/清水由紀 トランペット/高木 信 金春流能楽師/村岡聖美

全席指定 S席:6,800円 A席:4,800円 中央区民割引:2,400円 学生:2,000円

《チケット・お問合せ》 株式会社マエストロ 《チケット》 e+(イープラス)

※新型コロナウイルス感染予防の観点から、50%の入場制限で上演いたします。

舞台監督/菅野 将 衣裳/てっしー ヘアメイク/エイミー前田

稽古ピアノ/鈴木架哉子, 松岡なごさ 字幕英訳/竹内真紀子 照明/(株)フルスペック



公益財団法人 花王 芸術・科学財団

Asahi 公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

主催:日本橋オペラ研究会(中央区社会教育団体)

表紙の写真:1885年9月12日 長崎 上野彦馬撮影所 左:イヴ,中央:おカネさん(お菊さん),右:ピエール・ロティ  
Cover photo: Nagasaki 1885, Yves, Kane (Madame Chrysanthème), Loti